

# 観光と美術教育との関連についての予備的な考察

## Preliminary Consideration about the Relation of Sightseeing and Art Education

(2012年3月31日受理)

上 浦 千津子

Chizuko Kamiura

Key words : 美術教育, 観光, 真正性, 旅育

### 抄 録

生涯学習社会を展望した美術教育を考えると、学校等を卒業した後、我々と美術教育は、具体的にはどのような関わりをもってくるのかを視野に、学校教育を考える必要があるように思われる。本稿では、これまで筆者が研究してきた生涯学習社会を展望した美術教育を踏まえ、観光を手掛かりとした美術教育の可能性について考察するため、観光と美術教育との関連について、予備的な考察を行うものである。

### はじめに

「甘く澄んだ空気を吸えること」、「すばらしい景色を眺められること」、「美しい絵画を見られること」、「美しい音楽を聴けること」、「美しい教会を見られること」、「美しい彫像を見られること」。スタンダールが姉妹にあてた手紙では、イタリア旅行の楽しみを、このように綴っている<sup>1)</sup>。スタンダールにとって旅と美的観光とは、一体化されていたことが伺える。

また、マルク・ボワイエは、観光の「発明と模倣」の構造を示し、もっとも独創的なもの（国際的な名声を持つ映画や演劇、絵画や文学の「スターたち」）が観光を発明する<sup>2)</sup>、としており、観光の創造的な側面を強調している。他方、美術館や遺跡の訪問、さまざまな景観の観察、写生、文学や歴史、文化との関係で語られる美術は、「観光」を契機とすることも少なくない。幼稚園や小学校においても、生涯学習を視野に、美術館や博物館などの社会教育施設の訪問や遠足といった観光に近い形で多様な学習をする。

本稿は、子どもの造形教育の意義や内容、方法の探求

に向け、観光と美術教育との接点や関係性を探る予備的な考察を行うものである。

### I 観光とは

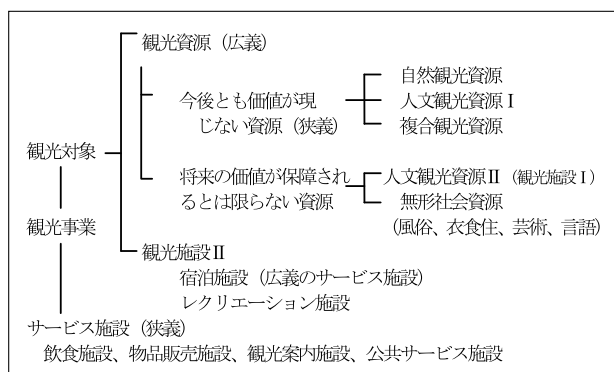
1969年の観光政策審議会答申では、「観光はレクリエーションの一部」であること、「日常生活圏を離れて行うレクリエーションを観光」と定義している<sup>3)</sup>。「観光」は、そもそも国の威光を示すものであり、ボワイエは、「観光」が18世紀のイギリスにおいて出現したとしている<sup>4)</sup>。

なお、「観光」の英訳は、“sight-seeing”，「観光客」では，“a tourist;a sightseer”とある。「観光事業」や「観光シーズン」で，“the tourist industry”，“the tourist season”と用いられている“tour-”は、ラテン語のtornus（＝ろくろ）を語源としており、「ツーリズムという言葉は19世紀中ずっと軽蔑的な含意を持っていた」といわれる<sup>5)</sup>。

今日、各地において観光マップおよび観光旅行のパンフレットがひしめきあい、国際観光都市を目指す地域では、中高年を巻き込んだ観光ボランティア、通訳ボラン

ティア、美術館友の会、観光協会、NPOなど、観光なくしては地域や、地域の行政が語られないほどである。ポール・レオンは、「かつて観光は巧みに旅行する自己本位の技術であった。今日では上手にもてなすための全国規模の産業となっている。その結果、観光は個人ないし集団の娯楽という領域から、一気に一般経済の領域へと移行したのである」<sup>6)</sup>と述べ、観光と経済との関連について指摘している。日本においても、経済成長を続ける中国からの観光客誘致にむけた取り組みが本格化してきたことが報じられ、ツーリスト当事者としての意識以上に、観光客を受け入れる側としての国際的な感覚、教養、方法や対策、内容が求められるようになってきたといえる。

一般に、観光には、次の資料1のような関係があるとされる。資料1の「観光資源」の中でも、代替性のある観光施設には、存続のために魅力的な観光対象であるための不断の努力が求められ、中には時を経て観光対象でなくなりもする<sup>8)</sup>。ボワイエは、ガイドブックが示す星の数に応じて観光客が関心を抱くことを例に、「観光」には文化的な装置が関わっていると示唆している<sup>9)</sup>。例えば、現代美術のメッカとして知られたニューヨークのSOHO地区は、かつて地価の安いマイノリティの居住区だったが、新進アーティストの産出によって高級住宅地となり、同じような地価の循環がチェルシー地区や他の地域でも連鎖的に起きている（そこまでの例は、日本では聞かない）。



資料1：溝尾（2003）『観光学—基本と実践』p.19 抜粋／  
観光資源、観光対象、観光施設、観光事業の関係

また、安福恵美子は、マッカーネルやアーリ、コーエンの研究から、『グローバルな消費文化』としてのツー

リズムが場所の形成や社会的イメージの構築に関わることを例に、ツーリズムの「演出性」と、真正性（オーセンティシティ）のある文化のありようについて言及している<sup>10)</sup>。「真正性」は、文献によっては「伝統」と同義で表現されてもいる<sup>11)</sup>。かつてアボリジニ美術が、「固有の意味と目的のために使用することで特徴づけられた」<sup>12)</sup>と主張された歴史は、「真正性」のありかを問うものでもあろう。「真正性」は、枠組みや目的、内容、経緯、方法など、視点を変えた様々な定義ができそうで興味深い。

テイラーは、マオリ族の民族ショーを通して、真正性に代わるものとしての「誠実さ」について提案しており、地域と観光との良好な相互作用によって好ましい観光政策が維持される可能性を示唆している<sup>13)</sup>。他方、吉田春生は、地域住民がどのように生きたいのか、また、それを地方自治体はどう支援するかという視点を重要視し、「地域住民が自分たちの文化に誇りを持ち、ツーリズムに呑み込まれることを拒否する一面」<sup>14)</sup>があると述べている。

我が国を訪れる外国人旅行者は、2005年には670万人台を突破し、2003年に開始された官民が一体となったビジット・ジャパン・キャンペーン（VJC）や入国制度の緩和も手伝い、特に近隣アジア諸国からの海外旅行者が急増し、JNTO（国際観光振興機構）の訪日動機の調査では、訪日外国人の日本旅行の動機・期待は、「伝統文化・歴史的施設」がトップである<sup>16)</sup>。こうした統計結果をもとに、町おこしとしての「観光」が作られていく傾向もあると思われるが、地域にとって観光客が「よそ者」として地域に関わるというのではなく、地域住民と観光客が相互に尊重し、高めあえるような工夫が観光には求められている。

今日、我が国では査証交付の緩和に加え、買い物や食事、医療とのコンビネーションで中国人旅行者を誘致する試みがみられるが、「魅力的な国」と「訪問したことのある国」は必ずしも一致しておらず、又、国際観光客の到着数や国際観光収入で比較すると、アジア全体はヨーロッパ全体には及ばず<sup>17)</sup>、多様な課題があるといわれる。こうした世界的な情勢や現状に応じようとする取り組みの一つに、「食育」のもじりである「旅育」があげられる。

2007年6月の観光立国推進戦略会議の報告書で、地域密着型の「ニューツーリズム」といった旅行商品の発表とともに、「旅育」という言葉が用いられている。日本ツーリズム産業連合会でも、『旅育』の提案<sup>18)</sup>をしており、すでに小学校に様々な職種の講師を派遣し、出前授業を実施している。例えば、ホテルの従業員や料理人の講義などである。UNWTO（世界観光機関）と国連はツーリズムを余暇活動とは捉えておらず、ビジネスを含むビジターの活動を含んでいる<sup>19)</sup>。そして、2009年7月の観光立国推進戦略会議では、2020年までに2000万人の外国人旅行者の受け入れについて話し合われており、これを受け地方自治体でも小・中学校での実施に向けた対策が練られている。なお、「旅育」の目的は、「旅を通じて未知の世界、未知の人びとと出会い、感受性を豊かにすることで、知見を広げ、豊かな生活を送ることができる人間となること」とされる。

## II 観光と美術

### 1. 観光でつなぐ人と自然・文化

羅針盤や航路の発見は、かつて文学にも影響を与え、旅への憧れを強化してきた。また、グリューネヴァルトのイーゼンハイムの祭壇画は聖アントニウス病と巡礼の歴史抜きには語られない。こうしたヨーロッパの巡礼の歴史やハッジだけではなく、我が国においても19世紀初頭には伊勢参りや湯治を名目とした旅行が行われ、物語文学も発達した。高寺奎一郎は、「ツーリズムとは聖地を失った現代人の巡礼なのかもしれない」と述べ、コミュニタス（地位や役割から解放された状態）としてのツーリズムでの出会いにおける可能性としていくつかの仮説<sup>19)</sup>をあげている。例えば、次の3点である。

- 人間らしさを分かち合う平等な出会いを生む
- 構造に支配された状態では生まれないコミュニケーションを可能にする
- 平和な国際的コミュニティ形成に貢献できる

換言すれば、友好的なコミュニケーションによって、我々は人と人、地域と地域の相互関係を安定化させることができる可能性がある、ということだろうか。しかし、相互理解のための円滑なコミュニケーションは、小さな集団においてさえ成立しえないことがある。「分かり

あう」ことが困難な場を出て、オルタナティブな場で、自身のアイデンティティを見つけ、自分本来の生活リズムや、理想とする生活ポリシーを取り戻そうと、人は考えるのかもしれない。こうした、明るい「変化」をもたらすための名目として、「観光」が行われることもあろう。

1960年のReigrotskiとAndersonの研究に示された仮説では、「交流レベルの高さは、大衆の態度の感情面、行動面と高い相関を示す」ことが述べられているが、1956年の研究（Pool, Keller, Bauer）では「旅行はそれほど幅広い影響を与えない」、「問題意識の幅を広げる効果はある」とされ、高寺は、研究が行われた時代と現代とにおいてツーリストの量的ボリューム等が相違していることを指摘している<sup>20)</sup>。それは、ボワイエが、今日までの巡礼を含めた連続した歴史を否定し、「文化的パラダイムは急速な同一視を行わないように、そして不変というものはないのだということをわからせてくれる」<sup>21)</sup>と述べていることにも関連しよう。ともあれ観光は、人と人をつなぎ、自然や文化と親しむ扉を開かせる教育的な側面が少なくない。

例えば、観光施設において地域住民に最も期待されているのは、「教育的プログラム」であり、特別な展示でも大きなギフトショップでもない、という結果がある<sup>22)</sup>。地域の観光振興に関する取り組みにおいても、指針として体験や学習に力をいれることが表明されつつあり、周知のように美術館・博物館においては様々な教育プログラムが用意され、地域に拓かれる傾向にある。

### 2. 鑑賞と観光

そもそも、マッカーネルは、アトラクションを文化表象ととらえ、「ツーリズムは文化体験である」と捉えている<sup>23)</sup>。我が国でも、これまでの物見遊山といった形式の観光から、参加型、体験型に移行した観光政策がとられつつある。では、日本の「美術鑑賞」は、どのように観光と関わってきたのか。

五十殿利治は、「江戸から明治にかけて「受容＝鑑賞」に関わる美的な制度総体の変化」や『書画』という中国モデルから『美術』という西洋モデルへの転換に伴って「制作者の位置はむしろのこと、鑑賞する対象や場（書画展や展覧会から展覧会へ）が変化したために、観衆そ

のものが再編され、近代化にむけて再編成あるいは育成されなくてはならなかった」と述べ、かつて江戸時代の見世物見物において発生していた膨大な観衆が近代における観衆へと変身した経緯を示すとともに、高村光太郎が1910（明治43）年に、雑誌『文章世界』に「美術展覧会見物に就ての注意」を寄せ、美術鑑賞の極意を次のように伝えようとしたことを紹介している<sup>24)</sup>。

---

此の世知辛い世の中に一々芸術家を歴訪して其の作を味つて歩く事は出来ない業であるから、其等の作家の作品を一場に集めるといふのである。此のゆきさつを呑み込んで居て見て歩かないと、ありがた味も面白味も味はれにくい

---

五十殿によれば、高村は、文展には4日間通い展示作品を「ゆっくりと花でも見る気で眺める」ことや、「作家のことを頭に置いて作品に」向かうことなど、鑑賞方法を具体的に指示している<sup>25)</sup>。このことは、最初の内国勸業博覧会における小冊子『明治十年内国勸業博覧会場案内』で内国勸業博覧会事務局が怠惰を戒めて、来場者に展示品を判定する審査官のような役割を求めていたのとは隔世の感があり、当時は、この高村の「美術鑑賞の極意」が「緑色の太陽」において芸術家の個性尊重を謳ったように、画期的なできごとであった<sup>26)</sup>。現代では、エルヴィン・パノフスキーやアビュゲル・ハウセンの美学理論を基にした鑑賞ワークショップ、作家の名前や、キャプションなしの展覧会、ギャラリートークをメインとした美術鑑賞の授業などがあるが、当時としては、「このような鑑賞方法についての議論が、専門家ではなく、『素人』と同じ角度から、公的になされること、それこそが文展がもたらした大きな波紋の一つ」であると、五十殿は説いている<sup>27)</sup>。現在、小学校においては対話型鑑賞教育がさかんに行われている。一つの作品について言葉を交わし合うことが定着してきたともいえよう。

今日、観光雑誌をめくると、「格調高い美しさが魅力」、「あの器のふるさを訪ねてみました」、「美術と音楽、おいしい料理がひとつになった芸術空間」、といった文言にであう<sup>28)</sup>。これは、自治体の関与する美術館だけではなく、地域の文化や産業が主体的に観光、地域の政策とリンクする中で、美術・工芸といった文化的要素を取

り入れた結果でもあろう。直島プロジェクトや金沢21世紀美術館など、美術を中心とした観光政策をはじめ、越後妻有トリエンナーレのようなプロジェクトや、『アートをめぐる旅ガイド』<sup>29)</sup>の出版など、美術と観光とが手を結ぶ取りくみはすでに実践されている。こうした状況の中、長谷川祐子は、開催地域の観客を置き去りにしている国際美術展を「空中戦の展覧会」と呼び、『『ひたすら巨大に均質に退屈に』なりつつある国際美術展』の現状を「現代美術展の地上戦化」と提言している<sup>30)</sup>。

そうした中、北川フラムがディレクターを務めた瀬戸内国際芸術祭は、「アートと海を巡る百日間の冒険」というサブタイトルが連想させるように、景観や地域住民の生活や文化をアートと共に楽しむイベントで、次のようなコンセプトで話題を呼んだ。

「現代アートの作家や建築家と、そこに暮らす人々との協働によるアートという結晶体は、日々の営みに新しい発見をもたらし、世界中の人々を惹きつけ、地域と世界が交わるきっかけになると考えます。瀬戸内国際芸術祭は、『民俗、芸能、祭り、風土記 という通時性』と『現代美術、建築、演劇という共時性』を交錯させ、瀬戸内海の魅力を世界に発信するプロジェクトです」<sup>31)</sup>

アーテリストやプロジェクトチームが、島々の設備や建物、風景を活用し、地域住民と交流しながら作品を作り上げることで、これまでの歴史と未来の新たなつながりを観光客に提案しているものと思われる。

### 3. 小学校での美術教育と観光の接点

我が国では、1947年の学習指導要領から「絵画・彫刻・建築など」の鑑賞が、1998年では鑑賞の指導の充実が、現在では、「児童一人一人が能動的な鑑賞ができるように配慮する」ことが謳われており、「多様な取組が考えられる」とされている<sup>32)</sup>。

学校での図画工作や美術の授業では、戸外に出での写生や共同制作などといった学習者にとって比較的開放的と思われるとりくみがあるが、それは当然ながら「レジャー」ではない。また、一般に人が趣味や療養として絵を描く場合は、美術の学習といった側面とともにレクリエーションといった側面がある。

資料1のように、溝尾によると、「芸術」は「将来の価値が保証されるとは限らない」資源である広義での

「無形社会資源」に属しており、「観光」の中の一部を占めるにすぎない。しかし、たとえ現在は「価値が保障されていない」ものでも、継続的な努力によって将来的には価値が認められるかもしれないものもまた、「芸術」である。

また、観光に関わる美術教育は、「美術の理解」や「美術館や博物館への理解」だけではない。広義では、観光事業やサービス施設においても接点がある。例えば、美しい風景、町なみの観察は、感性を豊かにするし、美術作品の制作活動につながる行為である。お土産物屋で地域の美術工芸品を手にもすることも同様である。旅の途中、様々な人と交わす会話の中にも美的な価値観に関連した情報が交わされる。「これまでの考察から、図1が想起された。

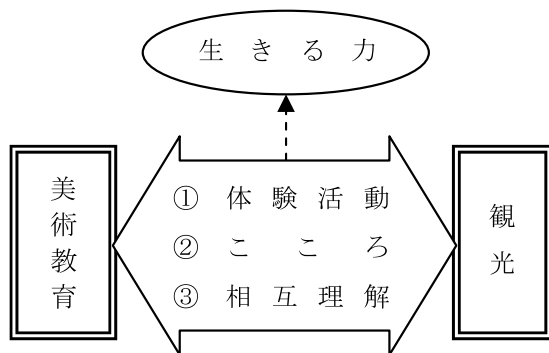


図1 美術教育と観光とのつながり

### ① 体験活動；活動を通してリズムをつかみ、感覚を拓く

まず、「観光」を通して、普段の生活にリズムを得ることが、「美術教育」につながる要素であると思われる。見たり、聞いたり、作業したり、考えたり、感じたり、ワクワクしたり、ドキドキしたり、集中したりすることで、心身ともにリフレッシュされ、日常生活の活性化が期待できるからである。能動的な日々の活動を行うことは、活動するリズムをつかむことと、社会生活を行う様々な感覚に目覚めていることが重要であると思われる。

### ② こころ；場を変えることによる、心や思考、人間関係の変化

観光対象（美術作品を含む）をめぐり、いつもとは違う立場で、「同じ何かを見る」という行為は、その場ならではの意見交換につながり、対等な人との交流を可能

とする。また、より豊かな心情をもたらし得る。さらに、いつもとは違った視点で物事を捉え新しい発見をすることで、発想の転換をもたらしえる。J・フォードがいうように思考が極めて限定されたもの<sup>33)</sup>だとすると、発想の転換は、思考を発展させたり、偏見を減らす上では欠かせない。

### ③ 相互理解；表現力と感受性、理解力の向上

そして①、②の要素から心に余裕が生まれ、相互理解が促進される可能性がある。様々な表現および表象との出会いや、自ら表現し、コミュニケーションする活動などから、地域や人への理解が進むのではないだろうか。その中で、表現力や感受性の向上も期待できよう。相互理解、表現力、感受性は、社会で人と人とが関わる上で、前提となる重要事項である。

これら「体験活動」、「こころ」、「相互理解」の3つの要素は、学習指導要領にもある「生きる力」の育成<sup>34)</sup>にもつながろう。そして、美術作品以外の観光対象の中にも、次の図2のような美術作品との相関があることが、これまで述べたボワイエや溝尾の文献を参考に考えられると思われる。

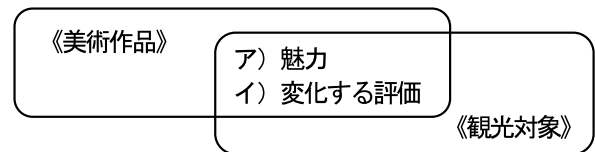


図2 美術作品と観光対象との相関

### ア) 魅力；魅力および真正性のありかが問われる

観光対象として、或いは、美術作品としての評価が、第三者より得られておらず、無名の場合は、その場に訪れる人が本当に充実感を感じられるような魅力が必要となってくる。そのための不断的な努力と、着想が必要で、観光対象の開発は、アート・マネジメントや芸術家育成に通じるものがあるだろう。なお、他と異なる魅力のありかはどこなのか、という点が美術作品にも他の観光対象にも求められ、観光客や美術の鑑賞者は、ともに見どころとなるものの発見に努めようとする。真正性については、先に述べたとおりであるが、どのようなところに真正性を見出すのか、という点も、真正性の質とともに重要だろう。

### イ) 変化する評価；将来の価値が未知数である。

- 
- ・メディアとの関係によって変化する。
  - ・特異的なものから普遍的なものへと変化する。
  - ・既存の評価に影響される傾向がある
- 

観光対象、美術作品ともに、メディアでの紹介のされ方によって評価が変化する。そのことは、現在のところ不評であっても、将来的には評価される可能性があることも意味する。また、初めてメディアで紹介された時には、観光対象も美術作品も、どこか特異に感じられるものだが、時を経るごとに、より普遍的なものへと変化する。H・S・ベッカーは、かつて行われていた観客を誘致するための芸術政策とともに、排除されていた芸術を、改めて国の遺産として組み込む芸術支援政策についても述べている<sup>35)</sup>。なお、美術作品も観光対象も、基本的には、ともに見る人の価値観によって評価は異なる。しかし、拙稿「絵画作品の価値について」において述べたように、美術作品は、「すでに受けている評価」に、見る人が依存する傾向があり<sup>36)</sup>、ボワイエの指摘のように、先述の観光対象も同様であるといわれる。

なお、「美術教育と観光」だけでなく、「美術作品と観光対象」においても、接点と類似性があり、「観光」と美術教育とが連携している例もある。

#### 4. 「観光」と連携した美術教育

地域の特性や景観を生かした教育は、学び手を夢中にさせる魅力や可能性に満ちており、すでに多くの実践がある。また、地域の伝統工芸や産業、祭りやインフラを生かしたイベントが次々に開発され、そこに、美術教育が介在してもいる。趣味のサークルでの「スケッチ旅行」など、美術・工芸をオプション（またはメイン）とした「観光」メニューも少なくない。なお、美術館訪問やキャンプでの工作作り、旅先での工芸製作などの他、高校や大学が町と関わりイベントを催す事例がある。

例えば、西宮船坂ビエンナーレでは、地域の古民家を活用した授業（写真1）やボランティアとして学生が運営に加わることで、地域の景観を生かした試みが実践されている。現在の課題としてプロデューサーは、「農業・アート・地域活性をいかに結び付けていくか、インフラの活用・維持管理をどうしていくか、地域の自立」といっ

た点などをあげ、「運営しつつ課題をさらにあぶりだししていく」として、「アートイベントとしての充実はもちろんですが、あくまでもそれは地域社会の活性化の手段のひとつであることをわれわれアーティストは忘れてはなりません」と述べ、「学校での美術教育」、「アート」、「地域」の三つのつながりの重要性について示唆している。また、各地で催されている「お雛祭り」のうち岡山の勝山の例では、商店や地域の寺社、商店といった町なみの景観を利用し、幼児から高齢者までが様々な素材と方法により作成した雛人形や、代々伝わる土人形など、工夫を凝らした展示により、地域が主体となったイベントを行っている（写真2）。そもそも、岡山県真庭市勝山で展示会を開催した土雛作家が、雛祭りを提案したことにはじまり<sup>37)</sup>、地元の幼稚園児や小学生の作品も展示されている。

他に、エイブルアートの販売やギャラリーでの作品展示、町家での工芸作品の販売（写真3）などを行うことで、寺社を中心とした地域の様々なイベントに訪れた観光客を誘致し、ボランティアの募集も呼び掛けている「たんぼぼの家」の例もある。また、美術館の例では、箱根彫刻の森美術館が、子どもが遊べる大型の遊具を作品として展示しており、ショッピングしたり、観光したり、散策したりしつつ、子どもと一緒に遊ぶことができる空間を実現している。

なお、JTBでは、「旅にでると子どもにスイッチが入る瞬間が必ずあります」、「こどもは豊かな体験を通じてさまざまな可能性を広げます」というキャッチ・コピーのもと、テレビの番組づくりや漁業体験、自然体験、といった多くの旅行商品を提案している。その中で、デジタルカメラを無料貸し出しし、「自然の色を探しに行こう」というテーマで色の感性を磨くことをねらいとした沖縄旅行の企画を提案している。

このように、観光と連携した美術教育、或いは美術教育と連携した観光は、すでに様々に展開されているが、行事としての形骸化、経済的な問題、労力、興味の減退、地域との関係などの課題もあると考えられる。ドリスゼンが示すパートナーシップの相互的な作用<sup>38)</sup>を中心とした試みと検討・実践は、そうした地域連携の課題解決の試案でもあろう。経験知の異なる教育者、保育者が、多様な条件下で柔軟に問題解決できるよう、教育内容・方

法を考え、メソッドとして確立していく視点にたつものであると思われる。なお、学外での活動は、教育的な課題とともに魅力も多いと思われる<sup>39)</sup>。

実際に「観光」の要素の一つである史跡の鑑賞を取り入れた美術教育を2011年中国学園子ども学部授業において試みた(写真4, 5)。中国学園地域連携センターの協力による地域ボランティアの説明を受けての旧跡のスケッチ(1年生)や、写真撮影、ビデオ撮影(3年生)などである。少なくとも、学生にとっては、毎日の通学途中のそばにある史跡に親しむ良き機会となった。本学近隣は、撫川うちわ製作所や撫川城跡、庭瀬城跡、水路、常夜灯など観光名所が多く、趣のある美しい景観である。将来の教育者・保育者を養成する上で、地域の文化について理解することは、豊かな情緒を育むことにおいても有益であると思われる。

以上、観光と連携した美術教育について次の点が浮かんだ。

- ・地域とのつながりの中で美術教育の内容、方法、意義を見出すこと。
- ・美術教育を主軸に、地域に貢献する方途を具体的に積極的に思考すること。
- ・地域に愛着をもつ視点を美術教育から育むこと。

また、単なる「観光」と「鑑賞」との違いを追及する試みは、今後の課題としたい。

### Ⅲ お わ り に

美しいものへの憧れは人の心を動かし、未踏の地への期待は文明に灯をかざしてきた。ボワイエがいうように、たとえ、もっとも独創的な者たちだけが「観光」を発明するとしても、時代を担う子どもたち一人ひとりが夫々、自分にとっての「美しさ」を感じ取れる自律的な人になってほしい。そう願う人は少なくなく、海を、民族を超えた思いともなっていよう。実際は、多様な観光プログラムの作成や体験などによって観光スポットは出現し、ボワイエの、「旅行という不変のカテゴリーは存在しない」<sup>40)</sup>といった言葉が想起される。地域・文化・自然と触れ合いながら、美術のもつ役割や可能性と実際に向き合い、

感じとり、受け取り、発掘し、表現することの魅力が、「観光」と美術教育との接点から伺える。

### 註

1. マルク・ボワイエ『観光のラビリンス』法政大学出版, 2006, p. 212。
2. 前掲, p. 134。
3. 溝尾良隆『観光学—基本と実践』古今書院, 2003, p. 4。
4. ボワイエ, 前掲書, p. 20。
5. ボワイエ, 前掲書, pp. 35-39。
6. 前掲, p. 40。
7. 溝尾, 前掲書, p. 19。
8. 前掲, p. 18。
9. ボワイエ, 前掲書, p. 289。
10. 安福恵美子『ツーリズムと文化体験』流通経済大学出版会, 2006, pp. 42-47。
11. 吉田春生『観光と地域社会』ミネルバ書房, 2006, p. 199。
12. ハワード・モーフィ『アボリジニ美術』岩波書店, 2003, p. 417。
13. 安福, 前掲書, p. 82-83。
14. 吉田, 前掲書, p. 199。
15. 独立行政法人 国際観光振興機構(JNTO)『JNTO訪日外客訪問地調査2004～2005』2006。
16. 前掲, p. 12。
17. ボワイエ, 前掲書, p. 329。
18. 溝尾, 前掲書, p. 10。
19. 高寺奎一郎『国際観光論』古今書院, 2006, pp. 11-24。
20. 前掲, p. 48-49。
21. ボワイエ, 前掲書, p. 34。
22. 岡野英伸『「観光学」論考 都市型観光関連施設の需要構造について』MESSA, 2004, p. 29。
23. 安福, 前掲書, p. 38。
24. 五十殿利治『観衆の成立』東京大学出版会, 2008, pp. 12-15。
25. 前掲, pp. 12-15。溝尾, 前掲書, p. 18。
26. 前掲, pp. 15-16。
27. 前掲, p. 16。

28. 新倉砂穂子（編）『九州ベストガイド2010年度版』成美堂出版, 2009。
29. 『美術手帖』美術出版社, 2009年 8月号増刊。
30. 暮沢剛巳, 難波祐子（編）『ビエンナーレの現在』青弓社, 2008, p. 200。
31. <http://setouchi-artfest.jp/about/concept/>
32. 文部科学省『小学校学習指導要領解説 図画工作編』2008, pp. 65-66。
33. ジュリアンヌ・フォード『思考のパラダイム=上』紀伊国屋書店, 1984, pp. 98-101。
34. 文部科学省, 前掲書, p. 1。
35. HOWARD S. BECKWR 'ART WORLDS -UPDATE AND EXPANDED' UNIVERSITY OF CALIFORNIA PRESS, 2008, pp. 181-185。
36. 上浦千津子, 初田隆「絵画作品の価値についての一考察」大学美術教育学会No.37, 2005, pp. 137-144。
37. 行藤典典『勝山のお雛祭り』勝山のお雛祭り実行委員会, 2008, p. 5。
38. Craig Dreeszen, Ph.D 'INTERSECTIONS ; Community Arts and Education Collaborations' Arts Extension Service, Division of Continuing Education , University of Massachusetts at Amherst, 2002, p. 19。
39. 上浦千津子「生涯学習社会を展望した美術館における異校種間連携アートプロジェクト」『芸術と教育』No. 9, 2005, p. 112。美術館を訪問したことがある小学生の方が美術館訪問の経験のない児童より有意に美術鑑賞への好感度が高い結果が示された。
40. ボワイエ, 前掲書, p. 34。

## 《写 真》



写真 1



写真 2



写真 3



写真 4



写真 5